朝倉工業団地遺跡群No. 7

株式会社ヤマト第３工場建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１５．３

前橋市教育委員会
株式会社ヤマト
技研コンサル株式会社

朝倉工業団地遺跡群No.７

株式会社ヤマト第３工場建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１５．３
前橋市教育委員会
株式会社ヤマト
技研コンサル株式会社

例　　言

1　本報告書は株式会社ヤマトの第３工場建設に伴う埋蔵文化財発掘報告書である。

2　発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡名	朝倉工業団地遺跡群 No. 7（前橋市 0635 遺跡）
調査場所	前橋市下佐鳥 1001-2
遺跡コード	26G86
発掘・整理担当者	前田和昭（技研コンサル株式会社）
調査員	岡野　茂
発掘調査期間	平成 26 年 12 月 1 日～平成 26 年 12 月 17 日
整理・報告書作成期間	平成 26 年 12 月 18 日～平成 27 年 3 月 20 日

3　本書の原稿執筆はＩを藤坂和延（前橋市教育委員会）、その他については岡野が担当した。

4　発掘調査および整理作業参加者は次のとおりである。

新井　寛　飯島冬子　楳原義久　遠藤好則　杉田友香　高橋一巳　田部井美砂子　福島禄子
矢内朝夫

5　本書における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管している。

6　下記の機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。

山下工業株式会社

凡　　例

1　挿図中に使用した北は座標北である。

2　挿図に国土地理院発行 1/200,000『宇都宮』『長野』、1/25,000『前橋』、前橋市発行 1/2,500 都市計画図を一部加工して使用した。

3　遺構名称は、溝：Wである。

4　遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。

遺構　溝・・・1/60　全体図・・・1/200

5　本文および表中の計測値については（　）は現存値を。

6　主な火山降下物等の略称と年代は次の通りである。

As-B（浅間Ｂ軽石：1108）、Hr-FP（榛名二ッ岳伊香保テフラ：６世紀中葉）、
Hr-FA（榛名二ッ岳渋川テフラ：６世紀初頭）、As-C（浅間Ｃ軽石：３世紀後葉～４世紀前半）

7　表紙には、『昭和 61 年航空写真集前橋全域』の空中写真を使用した。

目　　次

例言

凡例

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 2

Ⅲ　調査の方針と経過

1　調査範囲と基本方針…… 4

2　調査経過…… 5

Ⅳ　基本層序…… 5

Ⅴ　検出された遺構 …… 5

Ⅵ　発掘調査の成果と課題…… 7

挿図目次

Fig.1　遺跡位置図 …… 1

Fig.2　周辺遺跡図 …… 3

Fig.3　調査範囲図 …… 4

Fig.4　基本層序 …… 5

Fig.5　全体図 …… 6

Fig.6　W－1・2号溝…… 8

Fig.7　セクションA・B・D・E …… 9

Fig.8　W－3、セクションC・F・G・H …… 10

表目次

Tab.1　周辺遺跡一覧表…… 3

Tab.2　As-B下水田跡計測表 …… 10

写真図版目次

PL.1　調査区遠景（南から）　調査区遠景（東から）

PL.2　調査区全景（下が東）　W－1全景（北から）　W－1全景（北西から）　W－1全景（南西から）　W－1・2、As-B下水田全景（南西から）

PL.3　As-B下水田北西側全景（西から）トレンチA断面（南から）トレンチB西側断面（南東から）トレンチB東側断面（南西から）
トレンチC畦畔部分断面（南から）トレンチD　As-B水田部分断面（北から）　トレンチE断面（南から）　トレンチF断面（南から）

PL.4　トレンチG断面（南から）　トレンチH断面（南から）　作業風景（南側As-B下水田検出）　作業風景（空撮準備）

Ⅰ　調査に至る経緯

平成 26 年 9 月 26 日、事業者である株式会社ヤマトより、本遺跡内で工場増築の計画があり、埋蔵文化財の取扱いについて教育委員会へ問い合わせがあった。当該地では既存工場建設に伴い、平成 25 年 1 月 25 日から 2 月 3 日まで発掘調査を実施しており、平安時代（1108 年）の浅間山噴火に伴う軽石に覆われた水田跡、古代以降と推定される溝跡等を検出しているため、埋蔵文化財の保存について協議することとになった。

平成26年10月10日、株式会社ヤマトから提示された開発計画によると、一部に現状保存不可能な部分があり、10 月 17 日、発掘調査を実施し記録保存の措置を執ることで開発人の合意を得た。「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要綱」に則り、教育委員会の作成する調査仕様書に基づく監理・指導の下、発掘調査を実施することになり、平成 26 年 11 月 25 日付けで株式会社ヤマトと民間調査組織である技研コンサル株式会社の間で発掘調査・整理業務委託の契約を締結されるとともに、両者および教育委員会との間で三者協定が締結され、同年 12 月 1 日から現地調査が開始された。

Fig. 1　遺跡位置図

Ⅱ　遺跡の位置と環境

地理的環境

朝倉工業団遺跡群 No. 7 は前橋市街地の南方にあり、JR 前橋駅の南南東へ約 3.7Km に位置し、前橋市下佐鳥町 1001 番地２に所在する。周辺には関越自動車道・北関東自動車道といった高速道路や前橋・玉村線や高崎・駒形線などの主要な幹線道路が走り、交通網が発達している。沿線には朝倉を含め、天川・下川渕・西善・力丸などの工業団地が整備されている。

本遺跡は前橋台地の東に位置し、利根川左岸と広瀬川右岸の崖上の間に広がる水田地帯を端気川や藤川などの中小河川が南流している。本調査区は端気川左岸にあり、標高は約 85 mである。前橋台地は浅間山噴火に起因する火山泥流堆積土と、それを被覆する水成堆積層から成る洪積台地で、東は赤城山南麓斜面との間に形成されている広瀬川低地帯と直線的な崖で画され、北西には榛名山麓東南域に広がる相馬ヶ原扇状地の端部が迫っている。台地上を中小河川が浸蝕し、北西から南東方向に自然堤防と後背湿地の入り組む地形が形成されている。なお、利根川はかつて広瀬川低地帯を流れていたと考えられ、天文年間（16 世紀中頃）に洪水もしくは人為的に流路変更されたものと想定されている。

歴史的環境

本遺跡の周辺で縄文時代は遺跡はほとんど確認できないが、弥生時代では遺跡の数は非常に少ないが、櫛島川端遺跡（15）で中期の再葬墓、後期の竪穴住居跡が検出されている。

古墳時代にはいると遺跡の数は飛躍的に増加している。集落遺跡は自然堤防や微高地上に立地し、低地部では水田開発、それに伴い用水路の開鑿が行われたと考えられている。古墳時代前期の遺跡は、住居跡が本遺跡の周辺において、利根川左岸沿いに櫛島川端遺跡、公田東遺跡（16）で確認できる。また、広瀬川右岸では後閑団地遺跡（10）で検出されている。水田は、As-C 混土下水田が公田東遺跡、公田池尻遺跡で検出されている。古墳時代後期の遺跡は、住居跡が本遺跡の周辺において朝倉工業団地遺跡群（１）、下佐鳥遺跡（２）、川曲遺跡（３）、後閑Ⅱ遺跡（９）が確認でき、水田は、Hr-FA 下水田を公田東遺跡、朝倉工業団地遺跡群で検出されている。墓域としては、広瀬川右岸の自然堤防上に密集して古墳が造密されており、この古墳群は朝倉・広瀬古墳群として知られている。その数は昭和 10 年の県下一斉調査では前橋市 15 基、旧上川渕村 113 基、上陽村で 41 基が数えられている。しかし、後世の開墾や宅地造成により大半は未調査のまま削平され、現在では八幡山古墳、天神山古墳（ａ）、亀塚山古墳（ｄ）、金冠塚古墳、経塚古墳などが当時の古墳群の面影を残している。

奈良・平安時代の遺跡は引き続き多く、集落遺跡は微高地上に広く確認できる。西善鍛冶屋遺跡（６）、後閑Ⅱ遺跡では住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。水田は数多くの遺跡で As-B 下水田が調査されており、条里型地割を確認できる。その水田域は前橋市街南部から佐波郡玉村町方面まで及んでいる。特に宮地中田遺跡（４）では 92 枚の水田跡が検出され、東西３本、南北１本の方形区画の条里型水田が確認されている。

中・近世における特色として、環濠遺跡群の存在があげられる。前橋市域だけでも数十箇所に上り、市内から玉村町・高崎市方面にも広がっており、環濠の一部と考えられる溝跡が検出されている遺跡も多い。なお、屋敷に土塁を築き、濠をめぐらした館跡を環濠屋敷と呼び、それをいくつか集合したものが環濠遺跡群である。また、宿阿内城（ア）は環濠屋敷が複合・発展した形状と捉えられ、那波氏一族に関連する室町・戦国期の城館跡と考えられる。

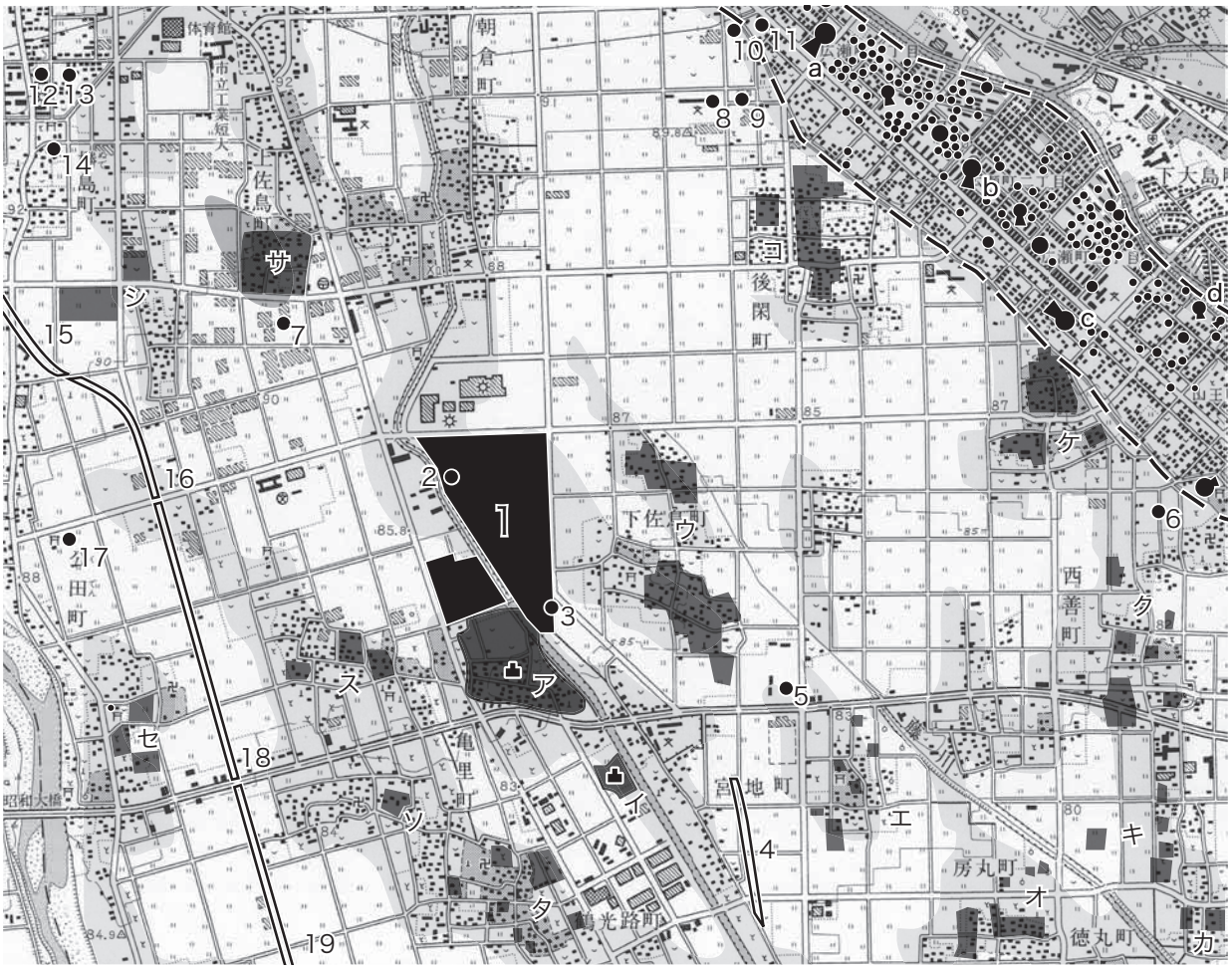


Fig. 2　周辺遺跡図

1	朝倉工業団地遺跡群	2	下佐鳥	3	川曲	4	宮地中田	5	東田	6	西善鍛冶屋	7	上佐鳥中原前Ⅰ～Ⅲ	8	後閑				
9	後閑Ⅱ	10	後閑団地	11	坊山	12	東京安寺	13	南京安寺	14	尼ヶ橋	15	櫛島川端	16	公田東				
17	公田東（調査会）	18	公田池尻	19	亀里平塚	a	天神山古墳	b	大屋敷古墳	c	上両家二子山古墳	d	亀塚山古墳	e	下川渕３号墳				
ア	宿阿内城	イ	阿内古城	ウ	下佐鳥環濠集落	エ	東宮地環濠遺構群	オ	房丸環濠遺構群	カ	横堀環濠遺構群	キ	旧西善環濠遺構群	ク	西善環濠遺構群				
ケ	山王環濠集落	コ	後閑環濠集落	サ	中沢屋敷	シ	福島屋敷	ス	亀里環濠遺構群	セ	三公田環濠遺構群	ソ	前田屋敷	タ	鶴小路亀里環濠遺構群				

Tab. 1　周辺遺跡一覧表

遺構の種別＼遺構表示番号		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
古墳時代の水田跡	As-C 混土層																○		○	
	As-C 混土層上																			
	Hr-FA 層下	○														○	○		○	○
	Hr-FA 洪水層下																			
	Hr-FP 層下																			
	Hr-FP 泥流層下																			
古墳時代の竪穴住居跡		後	後	後						後	前	後			○	前	前		前後	
奈良・平安時代の水田跡					○	○		○	○	○			○	○		○	○	○	○	○
奈良・平安時代の竪穴住居跡							○	○		○	○						○		○	
中・近世の水田跡	As-B 混土層																○		○	○
	As-A 層下																○			
	復旧溝など																			
中・近世その他の遺構	館跡など	○																		
	火葬土坑																			
	土坑墓																			○

Ⅲ　調査の方針と経過

1　調査範囲と基本方針

委託調査箇所は工場建設に伴う、増築施設の一部に該当し、調査対象は 370 ㎡である。調査区のグリットは平成 23 年度に行われた朝倉工業団地埋蔵文化財確認調査の設定に準拠し、４ｍピッチの方眼を打設した。グリット基点における世界平面直角座標は X=39,500.000m、Y= － 66,900.000m である。

調査方法は表土掘削・遺構確認・杭設定・遺構掘下げ・遺構精査・測量及び写真撮影の手順で実施した。表土掘削には 0.45 ㎥バックホーを使用。水田範囲と地形の把握のため調査区北壁面から 10 ｍ毎に東西方向でトレンチＡ・Ｂ・Ｃを設定し、南壁面にトレンチＤを設定した。図面作成はトータルステーション・電子平板を用いての測量・編集を行い、断面図についてはオルソーフォトに変換して編集を行った。記録写真は 35 ㎜モノクロ・リバーサル、デジタルカメラの３種を用いて撮影を実施し、調査区全景撮影についてはラジコンヘリコプターでの撮影を実施した。

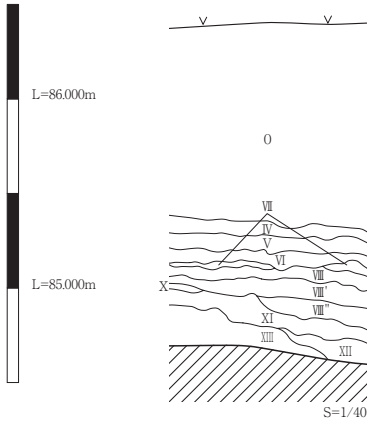
Fig.３　調査範囲図（Ｓ=1/5,000）

2　調査経過

発掘調査は表土掘削を平成 26 年 12 月 1 日と 2 日で実施した。表土掘削以降、順次調査を進め、12 日にラジコンヘリコプターを用いて全景撮影を実施した。また、同日に調査区全体の平面実測及び断面実測も終了した。16 日から埋め戻しを開始し、17 日で埋め戻し及び撤収作業を完了し、現地での発掘調査を終了した。その後、12 月 18 日より出土遺物・図面・写真等の整理作業及び報告書作成を開始した。

Ⅳ　基本層序

基本層序は As-B 下水田の残存状況が良好な調査区の北壁面東部で観察を行った結果、朝倉工業団地遺跡（No. 1・4）に概ね準拠すると考えられる。ただし、既存工場建設後のために過年度調査で確認されたⅠ～Ⅲ層は 0 層土に置き換わっているものと考えられる。また、Ⅸ層に相当する Hr-FA・FP を含む洪水層は今回確認されなかった。



0　黒褐色土（10YR3/2）締まり有り、粘性有り、造成客土。
Ⅳ　褐灰色土（10YR4/1）締まり有り、粘性有り、As-B 主体の混土、白色粒を微量含む。
Ⅴ　暗灰黄色土（2.5Y5/2）締りやや強い、粘性有り、As-B 主体の混土、鉄分の沈着が顕著、白色小粒を微量に含む。
Ⅵ　暗灰黄色土（2.5Y4/2）締り有り、粘性有り、As-B 主体の混土、鉄分の沈着がみとめられ、白色小粒を少量含む。
Ⅶ　褐灰色土（10YR5/1）締り弱い、粘性弱い、As-B 一次堆積層。
Ⅷ　黒褐色土（10YR2/2）締り有り、粘性やや強い、水田耕作土、As-C 軽石粒を少量含む。
Ⅷ'　灰黄褐色土（10YR5/2）締り有り、粘性強い、水田基盤層に相当、As-C 軽石粒を少量含む。
Ⅷ"　黒褐色土（10YR3/1）締り有り、粘性強い、Ⅸ とⅪ層の混在層。
Ⅹ　黒褐色土（10YR2/2）締り強い、粘性強い、As-C 混土。
Ⅺ　黒褐色土（10YR2/2）締り強い、粘性強い、粘性土、鉄分の沈着がみとめられる。
Ⅻ　褐灰色土（10YR5/1）締り強い、粘性強い、粘性土、鉄分の沈着が顕著。
Ⅻ　灰白色土（10YR7/1）締り強い、粘性強い、粘性土、鉄分の沈着がみとめれる。

Fig. 4　基本層序

Ⅴ　検出した遺構

1　遺跡の概要

朝倉工業団地遺跡群 No. 7 では、天仁元年（1108 年）に起きた浅間山の噴火によって噴出した浅間 B 軽石（As-B）に覆われた水田跡と、As-B 降下以降の As-B 混土を覆土とする溝跡が検出された。

2　中世以降

（1）溝跡

W－1 号溝跡（Fig. 6、PL. 1・2）

位置　X 49・50、Y 46～56　調査区中央付近を縦断してる。　**主軸方向**　N－2°－W　**規模**　長さ（36.53 m）上幅 2.80 m　下幅 2.09 m　深さ 0.31 m　**形状等**　北から南へ走向し、断面は皿状を呈する。底面において掘削痕を検出した。　**重複**　調査区南部で As-B 下水田と重複している。新旧関係は、As-B 下水田→本遺構である。**出土遺物**　須恵器、土師器をわずかに出土しているが、いずれも小片のため図示には至らず。　**時期**　As-B 軽石一次堆積層上位の B 混土（Ⅵ層）は本遺構の覆土直上にも堆積していることから、As-B 堆積以降、B 混土堆積以前と考えられる。**掘削痕について**　範囲は幅 0.17～0.50 m で溝底面のやや中央付近を緩やかに蛇行している。残存状況が良好なトレンチ A～B 区間において記録を行った。覆土はやや黒味のかかったきめ細かい砂粒が主体であるため、流水による自然堆積によって埋没したと考えられる。形状は流水による浸蝕の影響を受けて

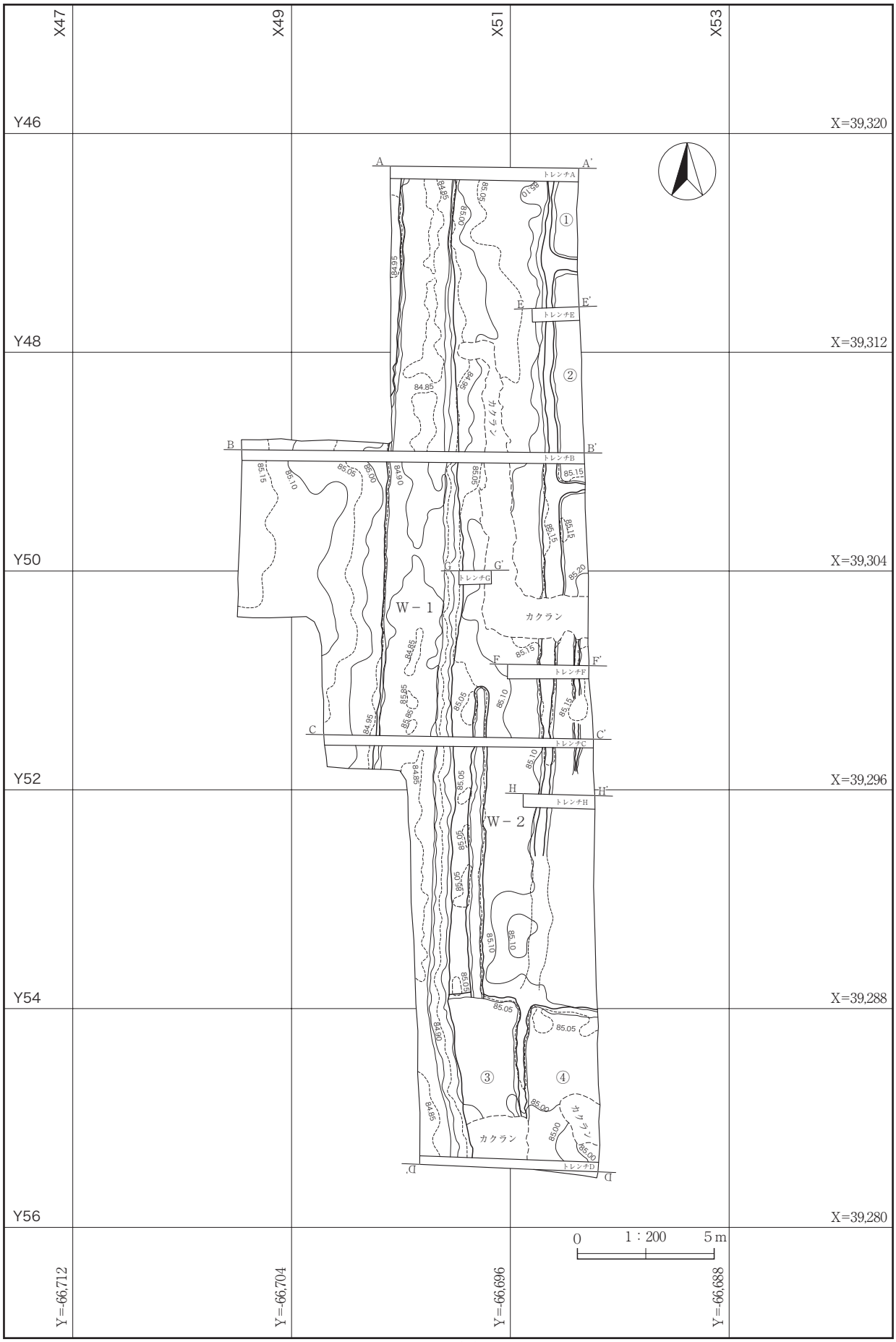

X47
X49
X51
X53
Y46
Y48
Y50
Y52
Y54
Y56
X=39,320
X=39,312
X=39,304
X=39,296
X=39,288
X=39,280
Y=66,712
Y=66,704
Y=66,696
Y=66,688
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
H
H'
トレンチA
トレンチB
トレンチC
トレンチD
トレンチE
トレンチF
トレンチG
トレンチH
①
②
③
④
W－1
W－2
カクラン
0
1：200
5m

Fig. 5　全体図

はいるが、個々の形状はほぼ同一で、大きさに幅があるのは掘削深度の違いによるものと推測できる。鉄製農具（鋤）により、掘削されたと考えられる。

W－２号溝跡（Fig. 6、PL. 2）

位置　X 50、Y 51 ～ 54　トレンチ C ～ D 区間で W － 1 号溝に並走している。　**主軸方向**　N － 1°－ W　**規模**　長さ（14.18 m）　上幅 0.50 m　下幅 0.32 m　深さ 0.06 m　形状等　北から南へ走向し、断面は皿状を呈する。底面は凸凹している。　**重複**　As-B 下水田と重複している。新旧関係は、As-B 下水田→本遺構である。**出土遺物**　土師器を 1 点出土しているが、小片のため図示にいたらず。　**時期**　覆土はⅥ層土を含むことから W － 1 より新しく、中世以降と考えられる。

3　平安時代

（1）As-B 軽石下水田（Fig. 5、PL. 2・3）

調査区の中央付近では撹乱や耕作機械の痕跡によって判然としないが、北東部と南部では As-B 軽石一次堆積層が良好に残っており、水田面は北東部で 0.7 ～ 6.0cm、南部で 3.0 ～ 8.0cm の厚さで直接覆われていた。

調査区全体の地形は中央を流れる W － 1 号溝が影響や水田面が限られているため東西方向は判然としないが、北から南へ緩やかに傾斜しており、北東で標高 85.12 m、南東で標高 85.03 m、比高差は約 0.1 mである。

北東部田面①・②の２区画、南部田面③・④の２区画でそれぞれ畦畔が検出されている。南北畦畔は走向はほぼ南北を指向しており、一部削平されているが調査区内を縦断すると推測される。なお、②と③の間は田面が推測できるものの南側が不明瞭であり計測不能なため田面としてカウントしなかった。東西方向の畦畔は W － 1 により削平されているため、北東部で２条を確認したが端部に位置するため全容の把握はできない。また、調査区内では水口は確認できなかった。水田耕作土面では起伏はみられるものの、明瞭な足跡や耕作痕は検出されなかった。出土遺物は須恵器、土師器、陶器の小片を出土をしているが、小片のため図示には至らず。

（2）溝跡

W－３号溝跡（Fig. 8、PL. 2・3）

位置　X 50･51、Y 50 ～ 52　トレンチ C･F･G･H。　**主軸方向**　N － 67°－ W　**規模**　長さ（8.84 m）　上幅 0.33 ～ 0.71 m　下幅 0.18 ～ 0.27 m　深さ 0.13 m　形状等　断面は逆台形を呈する。　**重複**　W － 1、As-B 下水田と重複している。新旧関係は、本遺構→ As-B 下水田→ W － 1 である。　**出土遺物**　出土遺物はなし　**時期**　As-B 下水田耕作基盤層（Ⅷ'層）直下から検出されていることから As-B 下水田形成以前と考えられる。**備考**　覆土は上位でシルト質土と砂質土が混じり合い、砂粒は粗から細へ漸位する。上下の層序から弘仁 9 年（818 年）の洪水砂の可能性が考えられる。

Ⅵ　発掘調査の成果と課題

朝倉工業団地遺跡群では、７次の調査が行われている。これまでの成果を基に遺構の展開と若干の考察を加えてみたい。遺跡地内を南東流する端気川右岸の自然堤防上では、古墳時代後期から住居が検出されているが、いずれも散発的であり、奈良・平安時代（７・10 世紀）の住居の出現をもって本格的な集落展開がなされていくものと考えられる。一方、左岸では As-C 混土下水田、Hr-FA 下水田が検出されていることから、少なくとも古墳時代には生産域として利用されていることが判明している。

As-B 下水田は、低地部のほぼ全域で確認されており、８・14 区の畦畔は本遺跡で検出された南北畦畔との間隔がそれぞれ約 110 m、100 mとなっている。中世においても掘削痕をもつW－１と並走する、同時期と考えられる No. 2（14 区）のW－２との間隔が、約 110 mであることから、いずれも条里型地割との関連性を窺わせる。しかしながら、現地表条里から判明した、宮地中田遺跡の坪境を基点として検討した結果では一致しなかった。

原因としては、いずれも小調査区であり東西畦畔の検出例が少ないこと、旧地形が端気川湾曲部の影響下にあり、地割が変則的であることが考えられる。周辺の朝倉・後閑・上佐鳥地域では条里型地割が遺存しており、As-B 下水田の調査事例もあることから、今後は地形や水系を意識しつつより広範囲に検討することが必要であろう。

参考文献

前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1997 「宮地中田遺跡」

前橋市教育委員会　2011 「朝倉工業団地埋蔵文化財確認調査報告書」

前橋市教育委員会　2012 「朝倉工業団地遺跡群」

前橋市教育委員会　2012 「朝倉工業団地遺跡群No.３」

前橋市教育委員会　2012 「朝倉工業団地遺跡群No.２」

前橋市教育委員会　2013 「朝倉工業団地遺跡群No.４」

前橋市教育委員会　2013 「朝倉工業団地遺跡群No.５」

前橋市教育委員会　2013 「朝倉工業団地遺跡群No.６」

広瀬桃木両用水土地改良　1994 「広桃用水史　通史編」

前南換地研究会　1994 「前南の換地」

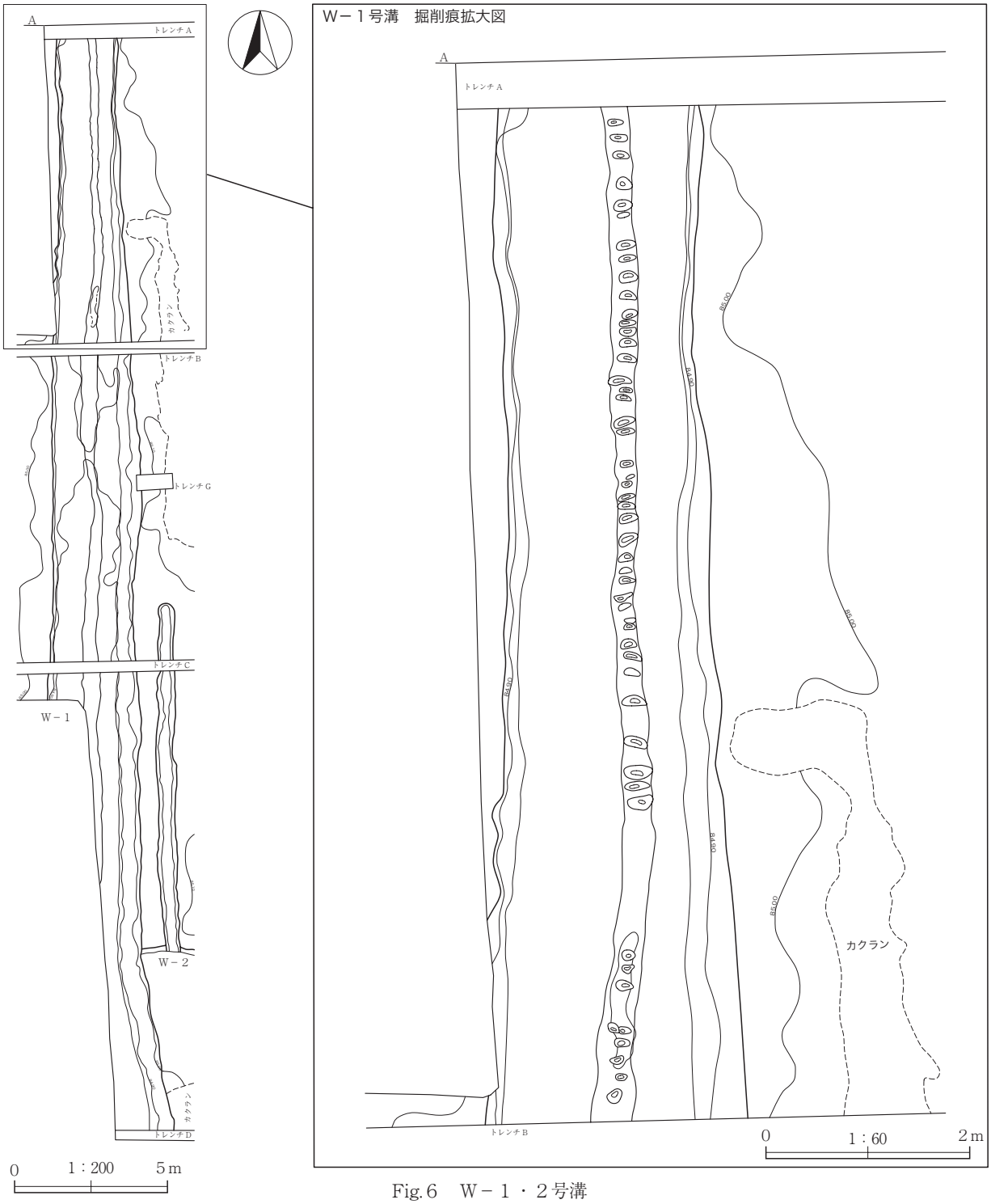


Fig.6　W－１・２号溝

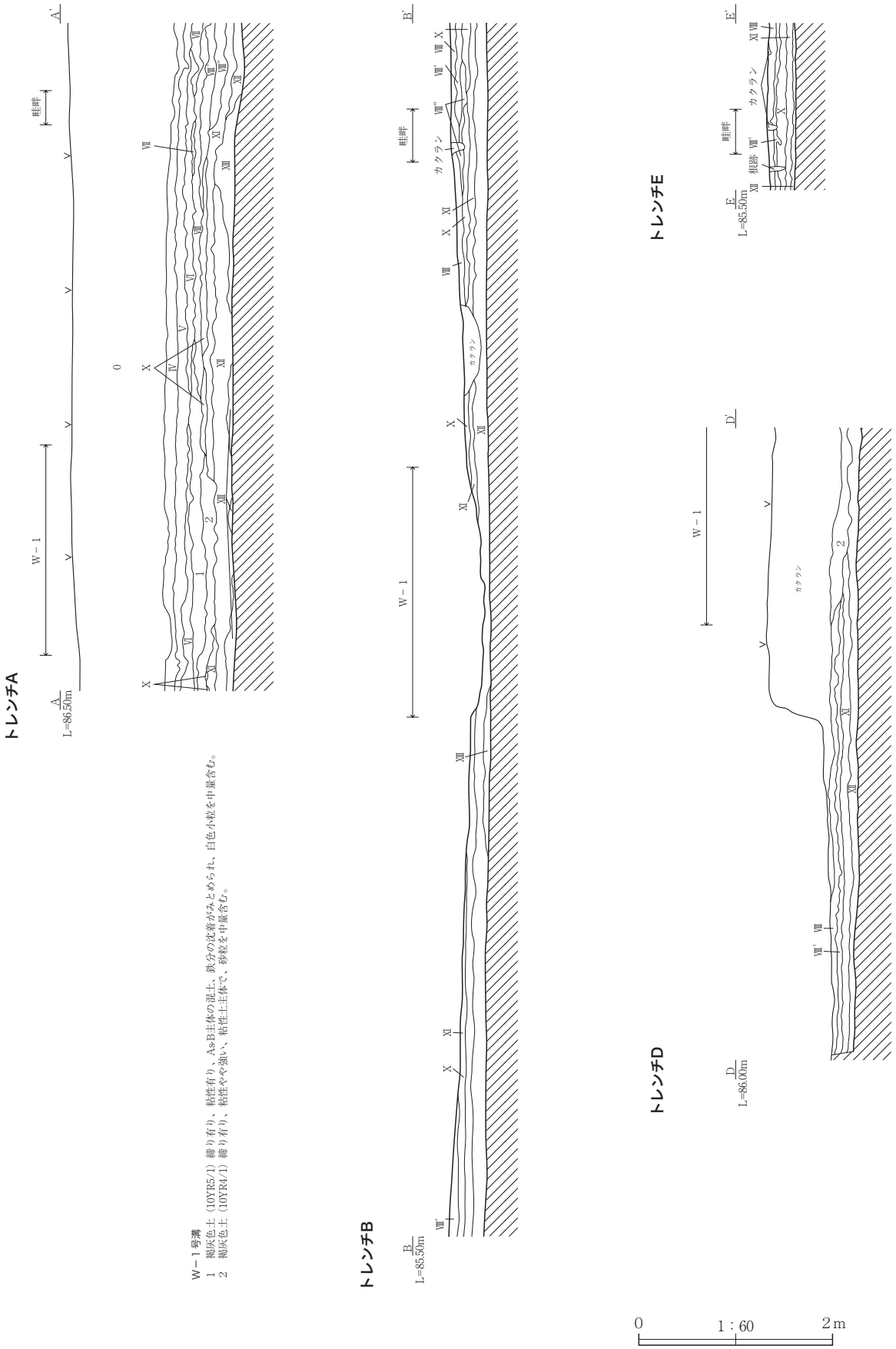


Fig.7　セクション A・B・D・E

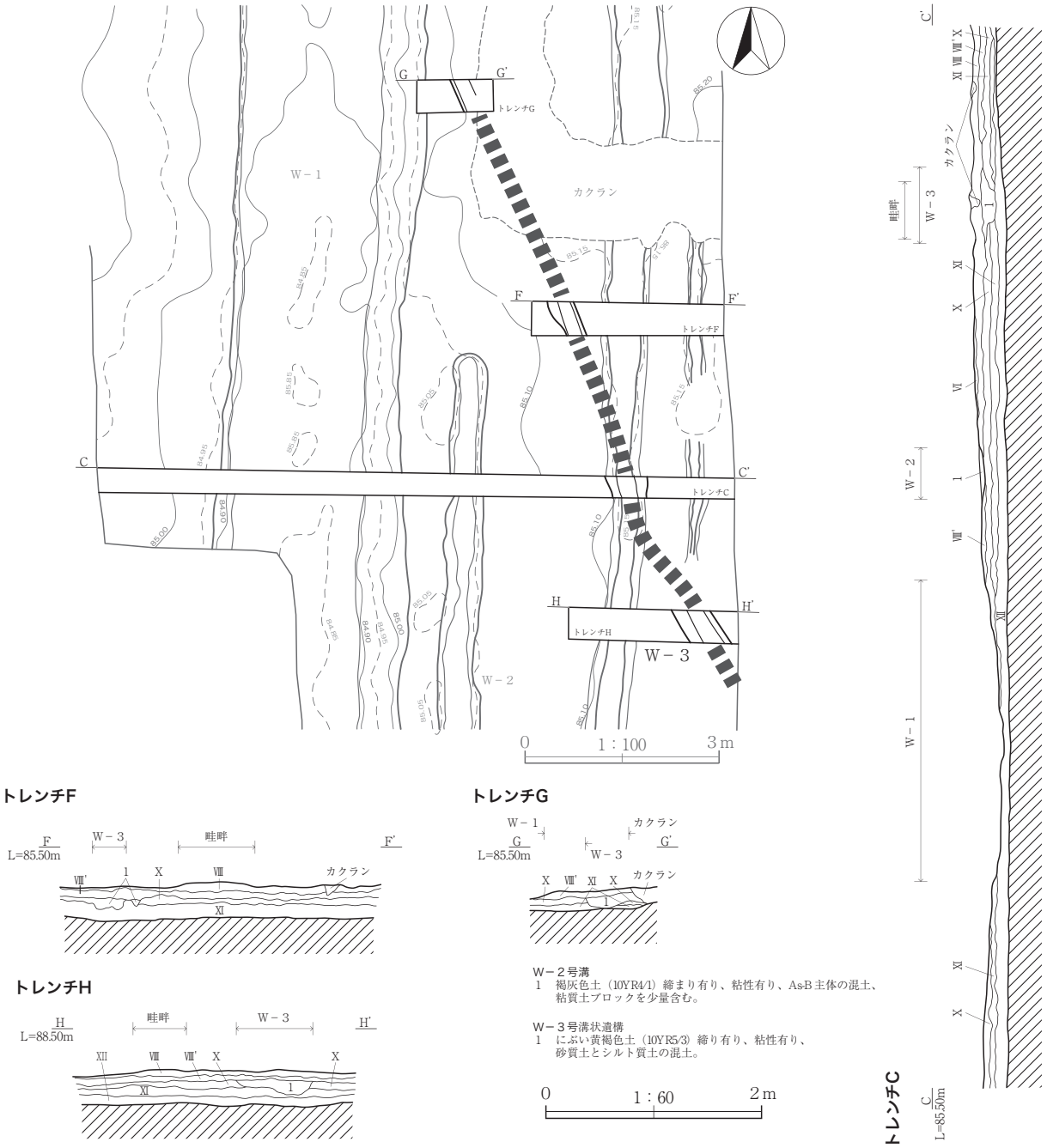


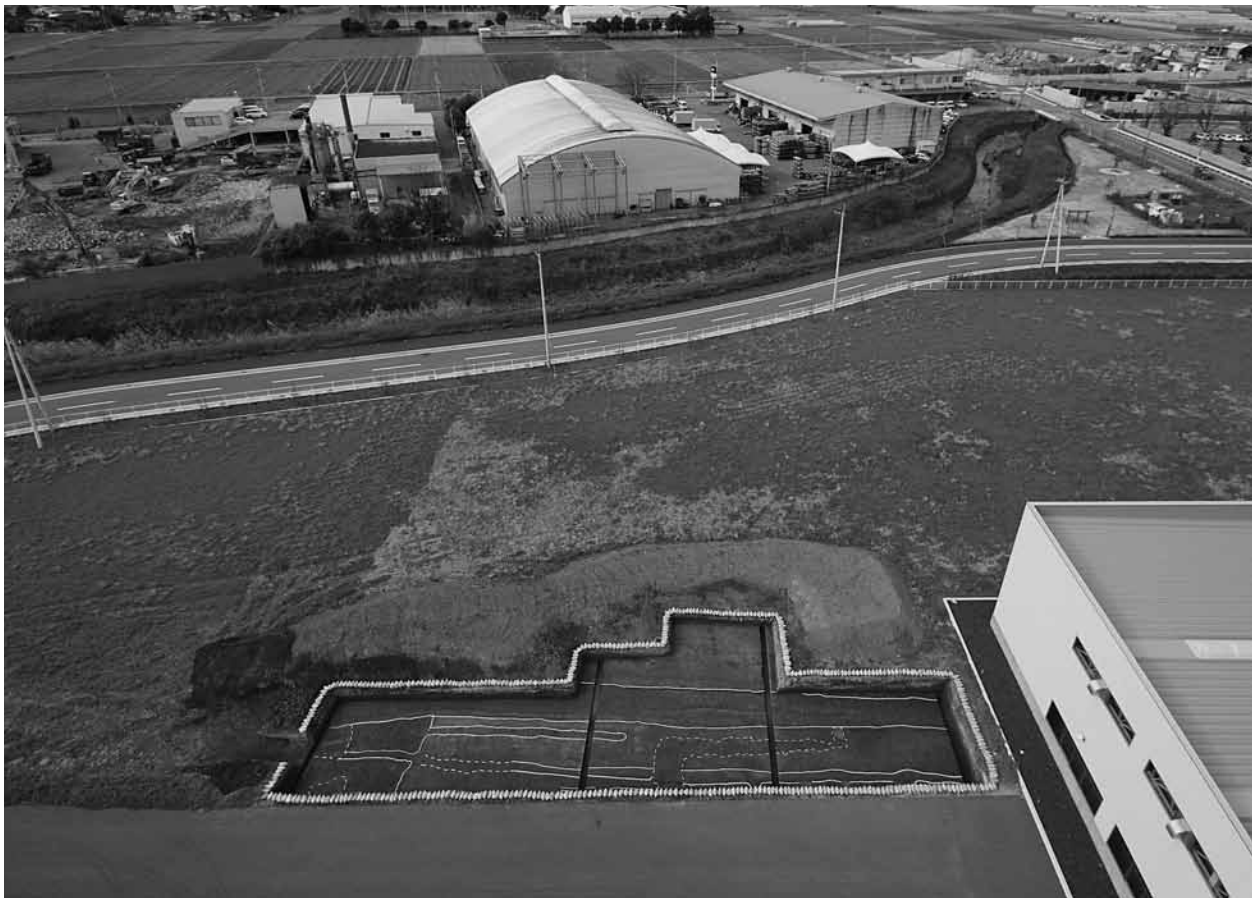
Fig.8　W－3、セクションC・F・G・H

Tab 2　As-B 下水田跡計測表

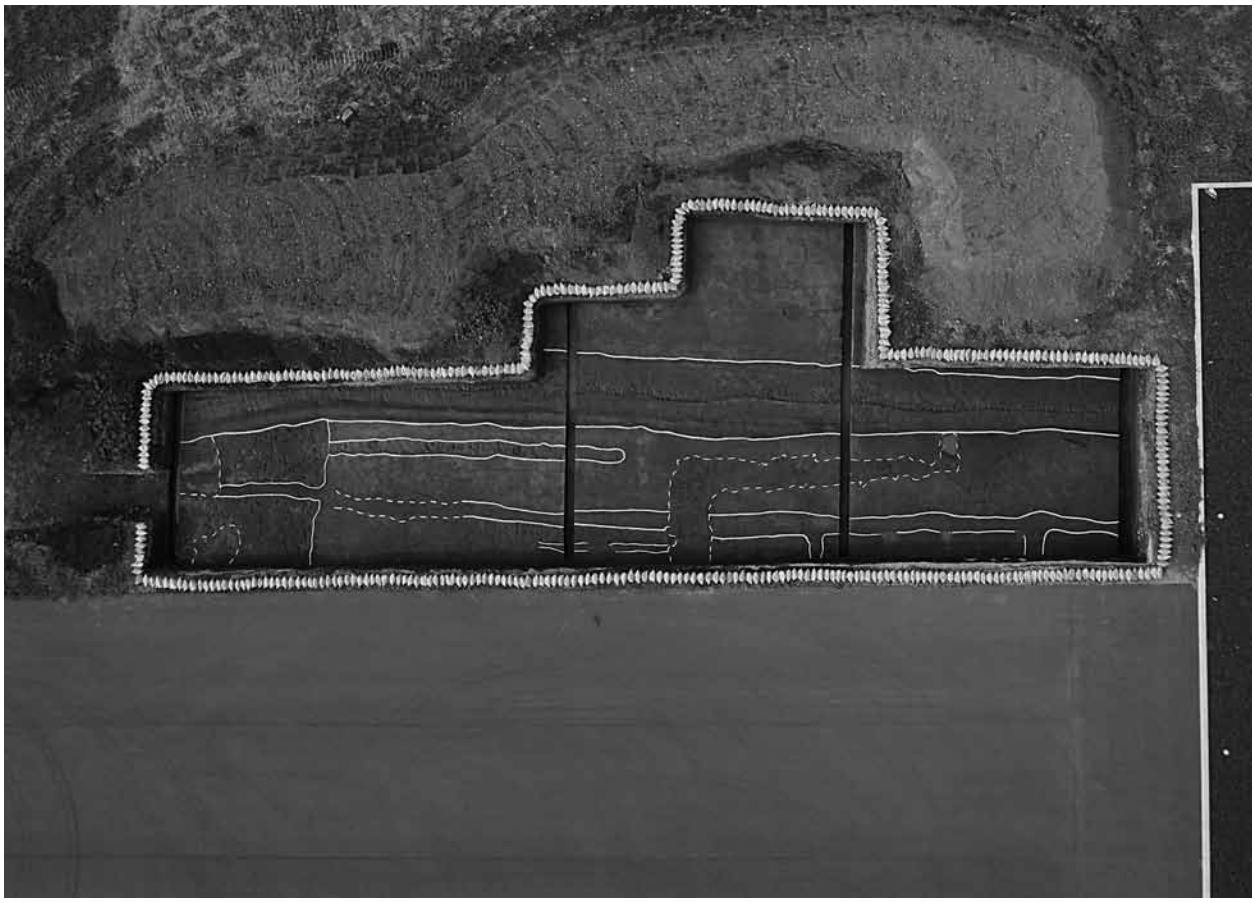
田面	面積（㎡）	南北（m）	東西（m）
①	(2.15)	(3.25)	(0.96)
②	(6.79)	7.76	(1.17)
③	(9.17)	(6.22)	(2.58)
④	(13.98)	(6.14)	(2.72)

写　真　図　版

調査区遠景（南から、奥右手に赤城山）



調査区遠景（東から、奥は端気川）

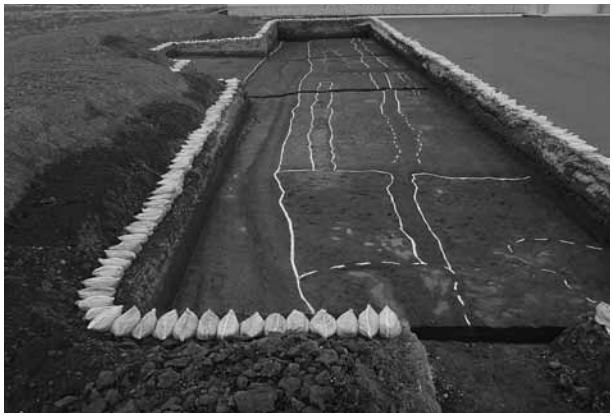


調査区全景（下が東）

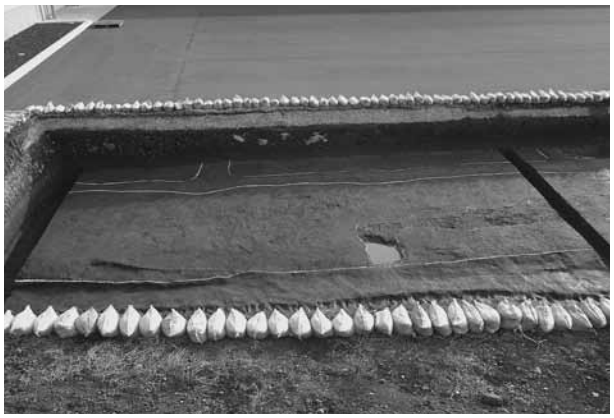
Ｗ－１全景（北から）

Ｗ－１全景（北西から）

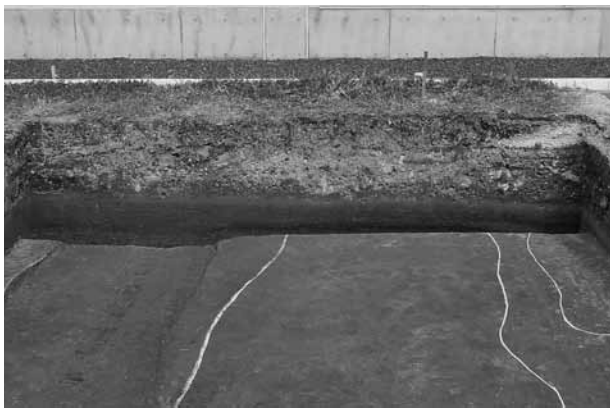
Ｗ－１全景（南西から）



Ｗ－１・２、As-B下水田全景（南西から）



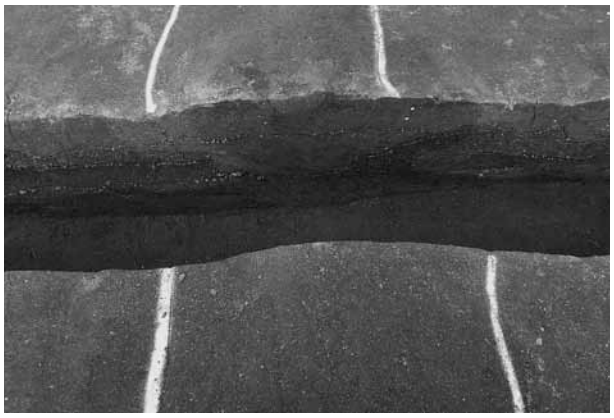
As-B下水田北西側全景（西から）



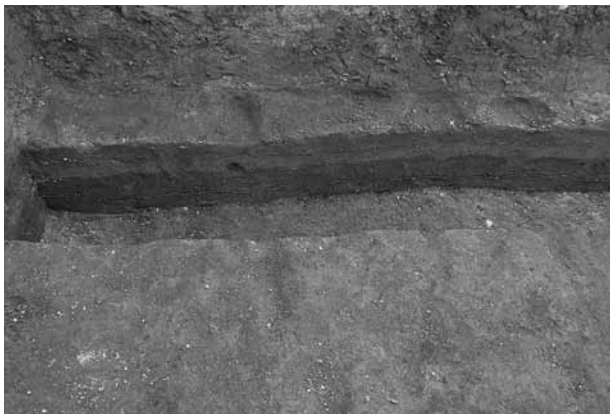
トレンチA断面（南から）

トレンチB西側断面（南東から）

トレンチB東側断面（南西から）



トレンチC 畦畔部分断面（南から）

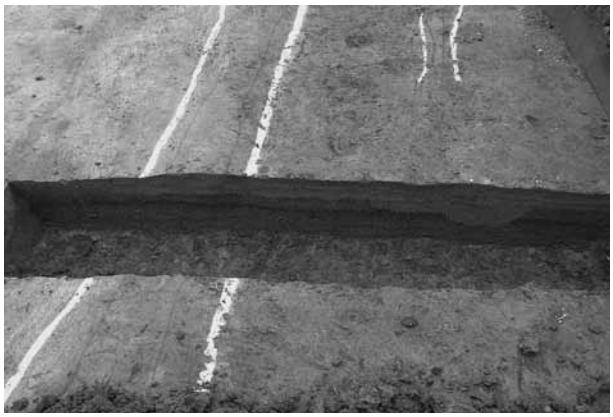


トレンチD　As-B 水田部分断面（北から）

トレンチE断面（南から）

トレンチF断面（南から）

トレンチG断面（南から）



トレンチH断面（南から）

作業風景（南側As-B下水田検出）

作業風景（空撮準備）

報告書抄録

カタカナ	アサクラコウギョウダンチイセキグンナンバー７
書名	朝倉工業団地遺跡群No.７
副書名	株式会社ヤマト第３工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	－
シリーズ名	－
シリーズ番号	－
編著者名	藤坂和延・岡野　茂
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371－0031　群馬県前橋市下小出町１丁目15番地３
発行機関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371－0853　群馬県前橋市総社町３丁目11番地４
発行年月日	2015年３月20日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	位置 北緯	位置 東経	調査期間	調査面積	調査原因
アサクラコウギョウダンチイセキグン 朝倉工業団地遺跡群 No.7 マエバシシゼロロクサンゴーイセキ （前橋市0635遺跡）	マエバシシシモサトリマチ 前橋市下佐鳥町 1001-2	102021	26G86	36°20'55	139°5'35	20141201 ～ 20141217	370㎡	工場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
アサクラコウギョウダンチイセキグン 朝倉工業団地遺跡群 No.7 マエバシシゼロロクサンゴーイセキ （前橋市0635遺跡）	生産 その他	平安時代 中世	As-B下水田溝　４面 ２条	須恵器 土師器	

朝倉工業団地遺跡群No.７

株式会社ヤマト第３工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2015年３月16日　印刷
2015年３月20日　発行

発行　前橋市教育委員会文化財保護課
〒371－0853　群馬県前橋市総社町３丁目11番地４
TEL　027-280-6511

編集　技研コンサル株式会社
印刷　朝日印刷工業株式会社